
雪神と少女

亜月れい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪神と少女

【Nコード】

N9227F

【作者名】

亜月れい

【あらすじ】

雪神と呼ばれる神様と雪神に好かれた少女。雪神、別名冬神は少女が住む地を守り、雪を降らせる事を仕事とする。降りしきる雪は冬の訪れだけでなく、大切なものも運んで来ていたのかもしれない。雪につけられた足跡は紛れもなく事実を表していた。

ブローグ

その少女は泣いていた。

先刻まで一緒にいたはずの両親とはぐれてしまったから。
真っ白な子猫を見つけ、物珍しくて追いかけていたらいつのまにか
はぐれてしまっていた。

一人で泣いていた。

少女の涙は雪に落ちて、小さな跡を作っていく。

小さな、とても軽い雪を踏む音がした。

「ママ！」

少女は振り替える。

だがそこには母親の姿はなく、透けるような白さの子猫がいた。

「ねこさん……」

その子猫はさつきから少女が追いかけていた猫だった。

途中で見失ってしまい、もうどこかに逃げたと思い込んでいた。

「……ねこさんも、一人なの？」

子猫は段々と少女に近づいてくる。

「みつるはね、ママとはぐれちゃった」

子猫は少女に擦り寄り小さな声で鳴く。

少女に泣かないで、と言っているようだった。

「美鶴」

ひどく落ち着いた声が聞こえた。

まわりを見渡してみても誰一人いない。

気のせいだと思い、もう一度猫の方に向き直る。

「泣かないで」

少女はぎゅっと抱きしめられていた。

さっきの声と同じ、声の持ち主が少女を抱きしめている。

いつのまにか少女は泣くのをやめていた。

その人の体温が伝わる。

少女には真っ白でふわふわな髪が見えた。

とても、心地よい。

「美鶴！」

両親の声が聞こえる。

途端にその温もりは消えてしまい、少女は寂しさに襲われる。

駆けつけてきた両親に抱きしめられ、自分は迷っていたのだと思い出した。

白猫は消えていて、あの人もいなくなっていた。

初雪の日

「雪村さあ」

頭上から声が聞こえ、頭を上げる。

残って作業をしていたようだ、まだ残っていた男子生徒に声をかけられる。

「付き合ってるヤツとかいる？」

突然の質問に驚いて、間を置いてから首を横にふる。

心なしに男子生徒の顔色に喜びが見える。

「じゃあ、俺と付き合ってみない？」

「え…ごめん」

驚きはした。

だが美鶴には何故急に付き合つという話になるのか分からない、その気持ちの方が大きかった。

肩を落とす男子生徒に、自分は帰る事を告げて美鶴は教室を出る。

普段は夕暮れで赤く染まる廊下が、今日はずいぶんと冷えていて薄暗い。

窓の外を見てみると厚い雲が空をおおっていた。

雨が降るかもしれない、と脳裏に掠めた考えを無視して美鶴は学校を出た。

外は凍えるような寒さだった。

吐く息は白くて、ポケットの中のカイロを握りしめながら家に向かう。

そろそろ初雪の季節だ。

声が美鶴の頭をよぎる。

耳じゃなくて頭に直接響くような感覚。

懐かしい？

浮かんだ一つの感情がひっかかる。

なぜかは、分からないけれど

そのまま帰るはずだった、でもなんとなく家の近くにある小さな森に足は向いていた。

道中、美鶴は小さな頃の事を思い出す。

小さな頃はまだ別の地に住んでいて、祖父母の家があるここには毎年冬になると遊びに来ていた。
今でも覚えている

7歳の冬にこの森で、迷子になった事。

迷う程複雑な森ではないはずなのに、美鶴は真っ白な子猫を追いかけて迷った。

そこで忘れられない体験をする。

祖母にそれを話してみたら雪神様に気に入られたんだね、なんて言われたのを覚えている。

「ゆ、き神様？」

そう呟いてみて、何かが脳内ではまった。

例えるなら、失ったパズルのピースがぴつたりはまるような。

木々が揺れる。

葉がついていない木々。

けれども木の葉のざわめきが聞こえる。

「美鶴」

風に乗って、また声が聞こえる。

もちろん振り向いても誰もいないのは分かっている。

それでも声が聞こえた方を振り返ってみる。

（やっぱり、いない…）

もう一度正面を向いて前を見据える。

足元で小さな鳴き声が聞こえ、同時にくすぐったい感覚がまとわりつく。

そこには白い子猫がいた。

「君は…」

勘違いかもしれないけど、昔の子猫に似ている気がする。
でもあれから10年は経っているのだから、あの白猫の子供だろうか。

美鶴はしゃがみこんで白猫を抱き上げた。ふわふわの毛に、思わず顔がほころぶ。

微かな振動が身体に伝わり美鶴は正気に戻る。

ポケットに入れたままのケータイが鳴っていた。

「もしもし」

電話は母からだった。

美鶴は抱えていた子猫を下に降ろして通話を続ける。

子猫はそれでも美鶴の足に擦り寄ってくる。

「分かりました」

そう母に告げて電話を切った。

美鶴は子猫を見て、話しかける。

「私行かなきゃ。君も早くお母さんのところに帰るんだよ」

ごめんね、と言いながら子猫の喉を撫でる。

気持ちよさそうに喉を鳴らしているのを見て少し切なくなった。

美鶴は立ち上がり、家に帰る事にした。

「あ…」

空を見上げて呟く。

いつのまにか雪が降ってきていた。

雪は粉雪で積もらないと分かっているけど、それでも何だか嬉しい。

美鶴は空を見ながら歩き出す。

家に着いてから気付いた。子猫が美鶴のあとをずっと着いて来ているのを。

美鶴は仕方なく、家に入れてしまった。

猫アレルギーの者はこの家にいないから大丈夫だろう。

子猫を抱えて、玄関のドアを開ける。

「ただいま」

白猫の存在

「ただいま戻りました」

美鶴の声が廊下に響く。

声に返答はなく、美鶴の足音だけが聞こえる。

呼び出したはずの母はどこにいるのやら。

とりあえず母の自室に向かって歩く。もちろん、子猫を抱えたまま。

「お母さん？美鶴です」

襖の前で中にいるであろう母に声をかける。

今度はちゃんと返事がかえってきた。

「失礼します」

静かに襖を開けて中に入る。

母は静かな目で美鶴を見ていた。

「お帰りなさい、美鶴」

そう挨拶をして微笑む美鶴の母、雪村千鶴
落ち着いた立ち居振る舞いに美しいその姿。
名家雪村の名に恥じない素晴らしい女性。

「あら、その猫…」

母は美鶴が抱えている猫に目をやる。その目には優しさが滲んでい

た。

「この子、家族がないみたいなんです」

「懷かれてしまったのね」

母は少し笑い子猫に手を伸ばす。

美鶴は子猫を離し母に預ける。

子猫は母にも擦り寄り、喉を撫でられ気持ちよさそうにしている。

「飼うの？」

「え…いいんですか？」

思わぬ母の一言。

美鶴には飼うという発想はなかったから。

「構わないわよ」

そう言っ母は柔らかく笑った。

「あの、話したい事と言うのは」

美鶴がそう切り出した瞬間、空気が緊張に包まれた。

母は子猫を抱きながら美鶴を一瞥した。

「美鶴には、雪村の家の事話していいでしょう？あなたの誕生日、明日だったわよね」

明日、12月21日

そういえば誕生日だ。

自分の誕生日を忘れているなんて、母が覚えているのに。

「雪村の、家？」

美鶴にはその言葉がやけに気になった。

何も知らない、と母は言うけれど地元の土地を管理する何十代と続いている名家だということくらいは知っている。

それ以上に何を説明するのだろうか、よりによって誕生日に。

母は静かに頷き再び口を開いた。

「そう。雪村の家についてあなたも知っておく必要がある」

「…分かりました」

美鶴はそう言い、母に静かに頭を垂れて部屋を出た。

「お久しぶりですわ、雪神様」

美鶴の足音が遠退いて行くのを確認した千鶴は白猫に頭を下げた。
白猫はそれに応えるような目で千鶴を見つめている。

「美鶴はまだ花嫁になるには未熟です。どうか未永きお付き合いを」

白猫は返事をするように小さく鳴いた。

また、いつのまにか子猫は美鶴のあとを着いてきていた。

「君はホントにいつのまにか私のそばにいるね……」

にゃあ、と白猫は声を上げる。その声はどこか嬉しそうだった。自室の襖を開けようとして手が止まる。ふと考えが頭をよぎった。

「名前、決めようか」

美鶴は子猫を抱き上げて、部屋に入った。

「うーん……白、シロ、は単純すぎるかな……」

子猫を降ろして床に座り、覗き込みながら唸る。当の子猫は可愛いらしく美鶴の手を舐めている。懐かれるのは嬉しい。だがこんなにも懐かれるのはおかしく思う。子猫と知り合って、まだ1時間もたっていない。

第一、猫とはきまぐれな生き物だったはずだ。生まれつき動物に懐かれやすい体質ではない。だとしたら、何故だろう。

「真っ白……まっしろ……
ましろでいいか」

思いつきで決まった名前、子猫は真白という名が与えられた。

雪村の家系

翌日21日、美鶴は朝から母に呼び出されていた。

学校は休み、普段は離れに住んでいる祖母も朝から母家の居間に集まっていた。

仕事のある父は、さすがにいなかったが。

「おはよう、美鶴」

「おはようございます」

祖母と挨拶を交わした後、母と祖母が座っているのとは反対に、向き合うように座る。

それにしても、何故祖母までわざわざ出向く必要があるのだろう。

「…さて」

お茶を一口飲んで母は話しだした。

「昨日も言ったけど、あなたには雪村家の事を知ってもらわ」

少し空気が重くなった。

そんな母に押されて、美鶴は黙って頷く事しかできない。

「まず、美鶴は雪神様を知ってる？」

「…とりあえず、一通りは知ってます」

雪神、別名は冬神。

四季の神として冬を守る神。主に雪を降らせる事を仕事とする。
古来よりこの地を守る神でもある。

「その雪神が、何か？」

雪神が何故関係している？

美鶴がそう尋ねると母はゆっくりと頷いた。

「雪村の家は2代に1度、娘を雪神に花嫁として捧げているの」

「はな、嫁？…ですか？」

話しが飛躍しすぎている。

美鶴は自分が呟いたその言葉の意味を理解できなかった。
神様と、結婚？

「あなたは今日、17歳になった。何か特別な力を感じないかしら」
掌を開いて見つめてみる。

目に見えたのはいつもと変わらない自分の手。

「……全然」

そう呟いていた。

特別な力など別に何も感じない。

美鶴のその言葉を聞いた母は小さくため息をついた。

「雪村の娘には雪神の血が流れているの。もちろん私やお祖母様や、美鶴、あなたにも流れているわ」

そんな話初耳だ。

今まで普通の人間として生きてきた。

自分の体に神の血が流れている、いきなりそう聞かされてそうなんですか、なんて信じれるわけがない。

「それは本当に？」

どうしても、美鶴は信じる事ができなかった。

「本当よ」

当然、と言うような母のその口調からも真実だと分かった。

突然、母は瞳を伏せる。

見たことのないような悲しみの母の表情だった。

「でも、全く力を感じないというのは少し困るわね」

はじめ、美鶴には意味が分からなかった。

「神の血をひいている私達は幼い頃から力があつた。でも…血が薄れているからか、血と相性が悪いのか…あなたは…」

「力が、出なかった…ですね」

美鶴がそう呟くと母は悲しそうに頷いた。

「力が現れなければ、雪神の花嫁にはなれないわ。古来より、血を絶やす事は最大の禁忌とされていた」

どくん

心臓が波打つ。

母の言葉に呼応するように波打つ。

自分は、何かを知っているんだ。

身体が震える。

緊張か、恐怖か。

慌ただしく廊下を走る音が聞こえる。

瞬間、勢いよく居間の襖が開いた。

「美鶴っ!!」

襖の近くに白髪で、金の瞳を持つ男がいた。

よほど急いでいたのか息を切らしている。こんな知り合いはいないはず。

「よかった、美鶴」

柔らかく笑って、美鶴をぎゅっと抱き締める。
急すぎて、声すら出ない。

「ちょ、ちよつと…！」

やっと状況を理解して美鶴は男を離そうと体を押す。
だけど美鶴の力では動かなくて、更にきつく抱きしめられる。

「起きたらいなくなつてたから、心配した」

男は言う。

てゆうか本当に誰なんだ。

目線の先では、母と祖母が微笑ましそうに美鶴を見ていた。

「あなた…誰？」

美鶴は声を振り絞った。

バツと体が離れて肩を掴まれる。

目の前にはひどく驚いたような顔があった。

「真白」

「えっ？」

美鶴がそう聞き返すと、またふわっと笑う。

「真白。美鶴がくれた、名前」

嬉々とした表情。

よく通る声で嬉しそうに話す。

「ま、真白！？」

驚いて思わず声が大きくなる。

男は嬉しそうに頷いた。

「え、ちょっと待って！真白ってちっちゃくて真っ白な猫…」

だったはず。

目の前にいる男、もとい真白をじっと見つめる。

白いふわふわの髪はどこか懐かしく、猫の真白を思わせる。

金色の瞳、そういえば真白の瞳も金だった。

かなりの美形、浮世離れた美形。

顔立ちが青年のようでもその表情には幼さが見える。

「猫は、雪神の仮の姿」

真白は言う。

雪神、

確かに真白はそう言った。

「そこからは私めが説明致します」

母が真白を見据えて言う。

その瞳はとても落ちて着いていた。

「白猫は雪神様の仮の姿。美鶴、あなたが昨日連れてきた白猫はあなたが嫁入りをする方なの」

啞然とした。開いた口が塞がらない。
真白が神様で結婚相手？

「嘘でしょ…」

いつのまにか猫になっていいる真白。美鶴のひざの上でごろごろと喉を鳴らしている。

ふと人間の姿になった真白が頭に浮かぶ。

普通の絵ならば、自分は男に膝枕をしているのではないか。
想像した美鶴は恥ずかしくなり、顔を伏せる。

「美鶴？」

「あ、ごめんなさい…」

母に声をかけられて顔を上げる。

心配そうな母。

どうやら美鶴が絶望して顔を伏せたと考えているらしい。

美鶴の返事を聞いて、母は話を続ける。

「ただ、さっきも言ったように力が現れなければ花嫁にはなれない。
歴代の娘は17の誕生日までに力が現れないなら一生花嫁にはなれなかった。でも今はあなたしかいない。だから美鶴、あなたに賭ける事にしたの」

母の瞳は真剣だった。

美鶴に賭けると言った母、どれほど危機的なのか、今は全身で感じる。

「でも千鶴、問題はこちらにもある」

人型になった真白が美鶴に寄り掛かり、呟く。

真白の人型に免疫がない美鶴は真白を押し返し、離れた。

「真白にも問題が？」

真白の思わぬ一言に美鶴は聞き返していた。

自分だけでなく雪神側にも何かあるのだろうか。

美鶴の問いに真白は自嘲気味に笑い、頷いた。

「まず美鶴、君に力はないと千鶴は言うけど僕は違うと思う。操り方を知らないから力がないように見えるだけだ」

力が表面に現れないのだから、結局は同じだけと言って真白は柔らかい笑みを見せた。

安心して、と言うように。

ちらりと母を見してみる。

母は大して驚いていないようだった。

でもその表情には少し安堵が見える。

「僕も、美鶴と同じで、力を上手く操れない」

先刻とは一変し、悲しみが見える真白。

「雪神は代替りをしたら花嫁を迎え入れることができる。それは雪村の娘の誕生日と同調しているけど」

「私や真白は、まだどちらも未熟で、それができないって事？」

誰に言うでもなく、美鶴は自分の考えをまとめるように呟く。
美鶴の言葉に、真白や母は頷いた。

「僕は感情が高ぶったときにしか力が現れない。操ることができないから雪神としての役目を果たす事ができない」

「役目って、ちゃんと雪を降らせるってこと？」

真白は頷き、少しの間の後不意に距離を縮めてきて美鶴をじっと見つめる。

「美鶴…」

「…はい」

真白は戸惑い考えるように一度、目を逸らす。
美鶴は首を傾げて真白を見る。

「嫌じゃない？」

「え…？」

もう一度真白は美鶴を見て言った。

真白の目は不安で揺れているようだ。

正直、美鶴はどう答えていいのか分からない。

「別に、嫌じゃないよ」

美鶴は今の自分の素直な思いを告げていた。不安げに揺れていた真白の瞳が丸くなる。

「だって、真白は私のこと助けてくれた」

母は驚きの表情で美鶴を見つめる。

真白は優しく美鶴を見ていた。

「小さい頃私真白に会った事あるよね。私泣いてた。真白は私に泣かないでって言って抱き締めてくれた」

懐かしさを感じたのは勘違いなんかじゃなかった。

10年前、美鶴は真白と出会っていたのだ。優しかった。

抱き締めてくれた腕も、かけてくれた言葉を。

「真白がお母さんとお父さんに私の場所を覚えてくれたんでしょう？」

美鶴がそう問うと真白は少し恥ずかしそうに頷いた。それを見た美鶴は微笑みを真白に向ける。

「真白だもん。嫌じゃ、ないよ」

一通りを話し終わった。

美鶴を自室へと返し、居間には千鶴と祖母が残っている。

「美鶴は大丈夫なんでしょうか」

千鶴が祖母に言う。

心配そうに、瞳を伏せて。

祖母は千鶴を見て口を開いた。

「あの子は雪神に好かれている。きっと、大丈夫よ」

千鶴はその言葉を聞いて、泣きそうになった。

「ねえ」

自室に戻った後、美鶴は真白と向かい合っていた。
まだ完全に疑問が消えたわけではない。

「何？」

真白は嬉しそうに返事をする。何がそんなに嬉しいのだろう。

「真白は10年前にも私に会ったよね。でもその時と全然変わっていないように見える。神様ってやっぱり長生きなの？」

少し間を置いて、真白は答える。

「人の一生なんて、神にとっては一瞬のよう」

真白の纏う雰囲気が変わった気がした。

口調が堅くなり、真白じゃないような気さえる。

「長い命の中血を絶やさないよう、雪神は何人も花嫁を迎える。当然花嫁は先に死んでいってしまう。長すぎる命は酷なものだ」

「花嫁つて、私だけになるんじゃないんだ…」

聞こえないように呟く。

少し悲しかった。

考えればよく分かる事なのに。

何だか顔を見れなくてうつむいてしまう。

突然握りしめていた両手をとられ、真白の手が美鶴の手を包む。

「美鶴は僕の1番最初の花嫁。僕は美鶴が好きだから」

美鶴に語りかける真白は真剣で、でもとても優しい顔をしていた。

血と力

翌朝、朝早く起きた美鶴は庭に向かっていた。
早く起きすぎて、たまにはと思い掃除をすると決めたのだ。

「寒い…」

十分着込んでいるのに、外の空気は冷たかった。
今日はどこまで冷え込むのか、雪は降るのか。

「雪を降らせるのは、雪神の仕事なんだよなー…」

なんとなく呟いてみた。

真白なら、なんて昨日は言っただけで実を言うとまだあまり実感で
きていない。

現実味がなさすぎるから。

「真白、部屋に置いてきちゃった」

まだぼんやりとした頭で考える。

昨日みたいにまた自分を探したりしないだろうか。

「……………うわ」

その時の事を思い出して美鶴は顔を赤くする。
あの時は驚きすぎて分からなかったけど、もしかして自分はものす
ごく恥ずかしい事をしでかしたのではないか。

「そつだよ、お母さんもお婆さんもいたし…」

自分の顔に熱が集まっていくのが分かる。
美鶴は脱力して地面に座り込んでしまう。
白猫ならば平気だ。

でもどうしても人間型には慣れない。
いや、慣れちゃいけない。

「そ、そうだよ…私、真白と結婚…」

恥ずかしくなり、その先は言えなかった。

美鶴は顔を上げる。

今までの考えを振り払うように首を振り、本来の目的である掃除をしようと立ち上がった。

庭を掃いて落ち葉を集める。

段々と気持ちが悪くなり落ちてきた。

朝日はまだ見えないけど、そんなに苦でもない。
たまにはこんな朝もいいかもしれない。
毎日は嫌だけど。

「椿の花だ」

「わっ！」

後ろから真白の声がした。

驚いて箒を落としてしまう。

振り向いてみると、そこには眠そうに目を擦っている真白がいた。

「ま、真白」

「おはよう美鶴」

微笑んで挨拶をする。

そんな笑顔で言われたら責める気を無くしてしまう。

「起きたの？もしかして、私起こしちゃった？」

おずおずと真白に聞く。

昨日も結構遅い時間に起きていた。

実はまだ全然寝足りないんじゃないかと思ってしまう。

自分のせいで起こしてしまったなら謝らなければいけないから。

「美鶴と一緒に。たまには早起しなきゃ」

これはかなり気を使わせているのではないか。

でもそんな事、真白の笑顔を前にして言えなかった。

真白が縁側から降りてきて、美鶴のそばに寄る。

どこから見つけたのか首にマフラーを巻いていた。

神様でもやっぱ寒いのだろうか。

「真っ赤だ」

開きかけの椿の花を見て真白は呟く。

「椿、好きなの？」

美鶴がそう尋ねると真白は頷いた。

どこか、懐かしそうに。

「前は雪が嫌いだった。いつかは溶けて無くなってしまっ、真っ白だからすぐに染まる。それってなんだか自分がないみたいだと思っと思ってた」

真白は美鶴に向き直り、語り始める。
寂しさなどは見えなかった。

「椿には綺麗な赤という色がある。美鶴は知ってる？椿は花びらから散るのではなくて、萼がくごと落ちるんだ。綺麗なまま、散る。花に憧れるなんておかしいかもしれないけど、昔は本当に羨ましかった」

「昔、は？」

美鶴がそう聞くと真白はうん、と頷く。
今度は優しい笑顔で話す。

「でも気づいた。雪は跡を残すことができる。真っ白なのだって、綺麗だ。意味がないわけじゃない、ちゃんと自分だってある。それに雪は、人を喜ばせる事だってある」

「私は雪、好きだよ」

美鶴は空を見上げて呟く。

今日もまた、雪雲が空を覆っていた。
息を吐くと白くて宙に消えていった。

「僕も今は大好きだ」

返ってきた真白の言葉を聞いて美鶴は微笑む。

居間で朝食を摂った後、自室で猫になった真白と遊んでいた。
やはりまだ人型には慣れない。

昨日は真白に頼んで猫のまま寝てもらった。

「猫のままならいいに…」

あまり意識しないで呟く。
突然美鶴の視界が曇った。

「美鶴が望むなら、ずっと猫のままにいる！」

真白の声が聞こえたと思ったら、真白が人型に戻っていた。
距離が、近い。

美鶴は慌ててすごい勢いで真白から離れる。
その行動を見た真白が、泣きそうな顔をしていた。

「ご、ごめんなさい！その人型…慣れないだけなの。嫌とかじゃないから」

必死で真白に語りかける。

真白は消え入りそうな声でうん、と頷いた。

「それに少し感情的になったら戻るって事は、猫のままってそんなに楽じゃないんでしょう？」

諭すような口調で言う。

真白は口をつぐんでうつむいてしまった。
その姿が可愛くて、つい笑ってしまう。
美鶴は少しだけ真白のそばに寄ってみた。

「えっと…、人型は序々に慣らしていく、から」

「…分かった」

満面の笑顔

この笑顔を前にして、だいぶ時間がかかると思っけど、とはさすがに言えなかった。

何故か真白の笑顔には敵わない。

「私、男の人に免疫がないから…だから慣れないんだと思う。家族にはお父さん以外男の人なんていないし、学校でも男の子の友達なんていないし…。これから多分、いっぱい不快な思いさせちゃうけど、ごめんね」

急に真白が美鶴の頭に手を伸ばす。

少しびっくりして目を伏せたど、美鶴は受け入れる。

優しい、割れ物を扱うように控えめで優しい手つき。

顔を上げると、おろおろとしながらも自分の頭を撫でている真白がいた。

その様子がおかしくて美鶴は笑ってしまう。

「ねえ」

再び美鶴は真白に向き直り呟く。

真白は首を傾げて疑問を表している。

「昨日の話もう一回確認したいの。私に力があるって話、詳しく聞きたい」

「僕が知っている範囲でなら、全て話す」

快く頷いた真白。

美鶴は深呼吸をして再度口を開く。

「まず、力のことを教えて。雪村家の娘が持つ力って何？」

「退魔の力だよ」

聞き慣れない言葉、先刻の真白の様に首を傾げる。

「退魔の力は美鶴が僕に与えることで、僕は雪神となり美鶴は花嫁になれる」

「え？力を覚醒させるだけじゃ駄目なの？」

昨日とは少し話が違う。

美鶴がそう聞くと真白は静かに首を振った。

「力を分け与えることで僕らは本当の花嫁や雪神になれる。千鶴はちゃんと説明してなかったね」

「力って、どうやって覚醒させたり分け与えたりするの？」

「残念だけど、僕にも分からないんだ」

真白は苦笑いしながら言う。

ため息をひとつ吐いた後、思い出したそうに声をあげた。

「余談だけど、雪神は四季を司る神の一人だっというのを知っている？その神は他にも3人いて、それらは四季神と呼ばれている。四季神の心臓は、己が身に取り入れると強大な力を手に入れることができるから、その力を狙う奴らもいるんだ」

「つまり、私が持つその退魔の力っというのが雪神を守る力っってことなの？」

真白は頷き、笑顔を美鶴に向ける。

「やっぱり美鶴は賢いね。でもそれだけじゃない、美鶴の力を僕が貰えたとき、その力は美鶴も守る事ができる」

「えっ、と…それはどういう意味？」

話の流れでいくと自分が持つ力は雪神を守る力だという。でもその力は、美鶴も守るという真白の言葉の意味が分からなかった。

「いずれ分かる」

真白は微笑んでそれ以上は教えなかった。

闇夜に一筋の光

不思議な夢を見た。

雪が降っている中、美鶴はただ立ち尽くしている。見覚えがある景色、懐かしいとさえ感じる場所だ。気づくと自分は涙を流していた。

泣いているけど美鶴じゃない、誰かが泣いている。自分ではない誰かの記憶の中にいる感覚。どうやら本当に誰かの記憶のようだ。

「あなたに泣かれると、私はどうしていいのかわからない」

その声をかけられ指で涙を拭われる。

目の前に誰かいるのは確かなのに、肝心なその姿はぼやけて見えな
い。

「ごめんなさい」

口はそう言った。

美鶴の意思に添わず次々と謝罪の言葉を紡ぐ。
本当に見ていることしかできない。

「ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさい」

泣きじゃくることしかできない。

目の前にいる人は美鶴の腕をとり、優しく抱きしめて耳元で何かを
呟いた。

「　　つる、……　　み……　　み……つる」

ゆさゆさと揺らされている自分の体。ぼんやりと真白の声が聞こえて、ゆっくりと目を開ける。

目を開けて、視界に真白が映った瞬間に美鶴は夢の内容を忘れていた。

「美鶴、こんなところで寝たら風邪をひく」

真白が心配そうに美鶴を見ている。

また真白に探させてしまった。

顔を傾け、時計を見る。

もう午後の１１時になっていた。

こたつで本を読んでいたら寝てしまったようだ。

立ち上がるのと、体を起こす。

途端に美鶴の脳裏に何かがちらついた。

何かは、分らないが。

「美鶴？」

真白の声で我に返る。

心配そうに見つめてくる真白に笑みを返して、部屋に戻るよう促した。

その夜美鶴はなかなか寝付けなかった。

先ほどまで寝ていたからというのもある。

美鶴は自分の頭の中にある微かな違和感が気になって仕方なかった。

外は随分冷え込んでいて、余計に目が覚めてしまっ
つつその環境を活かして考え事をしようと美鶴は庭へ出たのだ。

「また、真白置いてきた……」

気がつけばいつも真白を置いてきている。

でも寝ているだろうから、起こすわけにもいかなかった。
というわけで今回は仕方ない。

美鶴はきれいに整えられた庭を見て思う。

明かりひとつない場所。

家からの明かりを頼りにすれば、歩けないこともないはずだ。
そしてここならば落ち着いて考え事ができるだろう。

美鶴は目を閉じて一回深呼吸をする。

静寂が自分を満たしていくのを感じ取る。

考える、血のことに先刻のこと。

自分に流れている血。

薄いがその中にあるという雪神を守る退魔の力。

四季神の心臓を狙う者、守る者。

正直言つて、疑問が全て消えたわけではない。

納得いかないことや分からないことだらけというのが今の本音。
何より、自分の存在自体が最も曖昧だと美鶴は思う。

「調べてみようか」

美鶴は目を開き、また考える。

そつだ、調べればいい。

なぜ今まで思いつかなかったんだろう。

「美鶴……？」

眠そうな声が聞こえて振り返る。案の定、そこにはふらふらと歩いている真白がいた。

「真白」

真白のもとに駆け寄る。

安堵の笑みを見せる真白を見て美鶴は後悔した。

また心配させてしまったんだ。

ひんやりとした手が美鶴の頬に添えられ、手が触れた瞬間、切なさ
がこみ上げてきた。

「ごめん、なさい」

顔を見ることができなくて俯く。

自然に自分の手を真白の手に重ねていた。

「何故あやまる？ 僕が勝手に追いかけてきたんだ。一緒に散歩した
いから」

優しい声だった。

本当に、真白は優しい。

顔を上げて真白を見る。

マフラーに厚い羽織を着ていて、寒さ対策はきっちりしているのに
手はとても冷たい。

しかもマフラーは今朝と同じものだった。

本当に一体どこから見つけたのだろう。

「ねえ、そのマフラーって……」

「これ？美鶴の部屋の押入れにあった」

やっぱり。

どこか見覚えがあると思っていた薄いピンクのマフラー。

美鶴が中学の初めの頃使っていたマフラーだ。

とゆうか問題はそこじゃない、何で勝手に人の部屋の押入れを開けているのだ。

と言ってやろうとも思ったが誇らしそうに嬉々として話す真白を見ていると言つ氣がなくなつた。

「…はあ」

ため息を吐いた美鶴を見て真白は、急に真剣な面持ちになる。

「何を考えていた？」

見透かされてるようだ。

真白に聞いてみようと思ひ美鶴は口を開く。

「調べてみようって考えてた。雪村の家のことや、なぜこの家は花嫁を捧げるようになったのかとか。私はあまりにも知らなさ過ぎるから」

述べた内容については真白も知らないようで、少し驚いている。その様子から察するに、調べる方法を真白は知らないのだろう。真白から視線を外し、星のない空を見上げた。

「……何か文献とか残ってないのかなあ」

独り言のように呟く。

するとその言葉に真白が意外な返答をしてきた。

「書物の場所なら知っている」

真白の言葉を聞いた美鶴はすぐに真白を見る。

「それ、どこにあるの？」

「美鶴が昨日訪れた森の最奥に、古い社があるんだ。確かそこに書物があったはず」

「それだ」

美鶴は小さく、しかし力強く言った。

不意に頭上から僅かな光が差す。

雲に隠されていた月が姿を現し、またすぐ雲に覆われる。

その光に美鶴は何故か希望を見出していた。

翌日、当然ながら平日の今日、美鶴は学校に行かなければいけない。真白が寝ている間に朝食を済ませて家を出ようと思っていた、が。

「あ、美鶴。おはよう」

朝食を摂った後、着替えようと自室に戻ると真白が布団を畳んでいた。

失敗だ。その姿を見た直後に美鶴は悟る。

「今日も早いんだね、早速調べに行く？」

真白にこれからの事を教えなければいけないと思うと気が重くなる。小さくため息をついて話はじめた。

「あのね真白」

「ん？」

どこか楽しそうに返事をして布団を押入れにしまう。

そんな後姿を見ているとますます気が重くなった。

布団をしまい終わった真白は、正座をする美鶴と向かい合う。

「私ね、これから学校いかなきゃいけないの」

「……そっか……」

真白の元気がなくなったのが目に見えて分かる。

悪いことは何もしていないのに美鶴に罪悪感が芽生えていた。

俯いて何も言わなくなった真白があまりにも可哀想に見えて美鶴は慌てて話す。

「な、なるべく早く帰ってくるから！その後、一緒に探しにいく？ね？」

必死になって語りかけると真白は静かに頷いた。

少し心配はあるが美鶴には時間がない。

急いで着替えて家を出た。

護る者、守られる物

今朝交わした約束の通り、美鶴は急いでいた。本当はもう少し早く帰ろうと思っていたが、通常より担任の話が長かったので焦っている。

真白のことだから怒りはしないと思う。

でも寂しがりはする、そう思って急いでいた。

今日、寒さこそ残ったが空は晴れ渡っていて雲ひとつない。

仕事は休みなのかな、と美鶴は空を見ながら思う。

角を曲がり門前にたどり着く。

息を整えながら、玄関に向かって歩いていった。

「ただいま」

玄関の扉を開けて、美鶴は言う。

中は相変わらず静まり返っていた。

真っ先に自室を目指す。

日の当たるところで気持ちよさそうに寝ている真白の姿が頭に浮かぶ。

だが襖を開けると、そこに真白はいなかった。

「……真白？」

名を呼んでみても返事はない。

姿が見えないのだから当然だろう。

とりあえず、鞆やコートを置いて真白を探そうと部屋を後にした。

美鶴の足音が響く。

足音以外、物音一つしない家の中。

たった半日一緒にいなかったただけなのに、美鶴は何か物足りなさを感じていた。

居間の前に来た美鶴は立ち止まった。

何故か分かる。

真白はこの部屋にいる。

そつと襖を開ける。

そこにはこたつで縮こまって寝ている真白がいた。

微笑ましくて、音をたてないように近寄っていく。

真白の頬にきらりと光る何かが見えて足を止め、真白を凝視する。よく見ると真白は泣いていた。

眠っているのは確かだ。涙が頬筋をつたって流れていた。

「真白……？」

美鶴は近寄れなかった。

後ろから糸で繋がれているように、一歩も前へ進むことができなかった。

「……………さ、ま」

小さく真白が何かを呟く。

その呟きを聞いた瞬間、美鶴を繋ぐ糸が切れ、足は一直線に真白へと向かっていった。

「どうしたの、苦しい？」

そばに座って真白の涙を拭う。

その顔は、苦悶の表情を浮かべている。

一体どんな悪夢を見ているのか。

「か……あ、さま」

再度、真白が呟く。

とても小さいけど確かに母様と言った。

そして真白は目が覚めたのか、薄く瞼を開いて虚ろに宙を見つめていた

「大丈夫？ 私だよ、分かるでしょ？」

美鶴は空いている真白の手に触れる。

すると存在を確かめるように強く握り返してきた。

変わらず冷たい手は、心の陰の部分を表しているようで離せない。瞳が美鶴を捉えてじっと見つめられる。

「うなされてたよ。ねえ、大丈夫？」

息があがっている真白を落ち着かせようと美鶴は声をかける。

美鶴を見ている瞳は、奥底で不安と恐れに揺れて、とてもじゃないけど放っておける状態ではない。

「いか……ない、で」

懇願する声。

一体、何をそこまで恐れているのだろう。
ふと美鶴は気づく。

真白が見つめているのは、美鶴ではない。

彼女を誰かと重ね合わせているように思える。

「私は、どこにもいかないから」

どこにも行かない。

美鶴はその言葉を強く心に刻む。

「だから、おやすみ」

美鶴はそう言つて強く手を握る。

真白は安心したように、弱く笑つてもう一度目を閉じた。
何故だろう。

先刻の真白は普段、美鶴には明かさな心晒していたように見え
た。

彼はその身の内に何を秘めているのだろう。
誰を自分に重ね合わせていたのか。

どんな夢を見ていて、何に恐れていたのか。

母様は、母親は。

昔、何があつたのか。

期を見て話してもらおうと思い、美鶴はため息をついた。

数分後、真白は目を覚ました。

心配そうに自分を見る美鶴を見て、彼は首を傾げる。

「おかえり美鶴。どうしたの？」

真白は自分が泣いていたことが分からないようだ。

言わないほうがいいと思つて美鶴は黙る。

でも夢のことを聞こうと思つて、話し始めた。

「ねえ、うなされてたみたいだけど、何の夢を見ていたの？」

真白は俯いてしまふ。

僅かに見えた顔は泣きそうなのを堪えているように見えた。

「話を聞くことしかできないけど、話すだけで楽になることだってあるよ」

辛そうな真白なんて見たくない。

少しでも力になりたくて、美鶴の口は勝手にそう告げていた。

真白は顔を上げて美鶴を見る。

その顔は微笑んでいた。

優しい微笑みのはず、なのにどこか悲しさが見え隠れしている。

そして美鶴を心配させまいとつくった笑みのようだ。

美鶴は、自分と真白の間に壁があるように感じた。

そんな笑顔なんて、望んでいない。

「ごめん……」

美鶴が謝ると今度は純粹に不思議がるような表情になった。

「何故、美鶴が謝る？」

今度は美鶴が俯く。

とにかく笑顔を真白に強要したことを謝りたかった。

「謝るのは僕のほうだ。昔の夢を見ていた。でも内容は美鶴には話せない」

「どうして……」

真白を責めようとは思っていない。

でも自然に責めるような口調になってしまふ。

「どうしても話せない。これは、僕の問題」

優しい拒絶だった。

どこまでも自分を気遣っている真白から、引き離されているようで悲しかった。

それでも美鶴は受け入れることにした。

「……分かった」

「でも……………、美鶴に話しておきたいことはある」

そう言っただけで急に真白が複雑な顔を見せて、口籠る。言いにくそうだと、傍から見ても分かる。

「どうしたの？」

美鶴がそう聞くと真白は悪い思いでも振り払うように、首を振って美鶴を見据える。

ひとつ、ため息をしておもむろに話しを始める。

「前にも話したと思う。雪神を狙う者がいるという話、ひとつ大切な事を言っていなかった」

そこまで言っただけで、真白はまた口籠った。

そんなに話し辛いことなのか。

美鶴はまた思う。

自分は真白に無理に話させようとしているのじゃないか。

「話し辛いのなら、無理に話さなくていいよ」

その言葉を聞いた真白は静かに首を横に振る。
美鶴を捉える瞳は強い意志を宿していた。

「雪神が力を宿すと、邪神や餓鬼などという存在が心臓を奪うことなど不可能になる。それならば、力の継承を阻止すればいいと思う奴らがいるんだ。だから、これからは美鶴を狙う者が出てくるだろう」

狙われる。

その言葉に胸が波立つ。

美鶴の血に刻まれた記憶が警鐘を鳴らしている。
この話、聞かなくても分かる気がした。

「注意してほしい。僕はずっとそばにいるわけにはいかないから、たとえそばにいても僕には美鶴を守るだけの力はない」

切実だった。

真白の思いはその目を見れば分かる。

恐れ、憂い、屈辱感。

いろいろな思いが混ざっていた。

「でも」

小さく真白が呟く。

「美鶴は絶対に、たとえ僕が死んでも守るから」

そう言って笑う。
嫌だった。

真白のその笑顔には距離を感じて。
自分が死んでもいいなんて言い方が嫌だった。

「なんで……なんで、そんな風に言うの。なんで笑えるの」

気づくと美鶴はそう言っていた。

悲しみ、怒り、いろいろな思いが混ざって今の美鶴を満たしていた。

「簡単に、死んでもいいなんて言わないで」

真白は美鶴にとって唯一無二の存在、なのに。

それが分かってもらえていなくて、悲しかった。

「自分のこと、命が軽い存在だなんて思わないで」

泣きそうになり、震える声を必死で抑えて言う。

真白はどんな思いで自分を守ると言ったのか。

自分の思いを分かってくれただろうか。

美鶴には、分からない。

「元々、出来損ないのこの身。美鶴を護るためなら、喜んで捨てる」

「やめてよ!」

美鶴は声を荒げて言う。

どうして分かってくれないのか、悲しくて腹立たしかった。

自嘲的な笑いを見せる真白を見て、それでも自分を護ると言った言葉聞いて、美鶴の涙が頬を伝った。

「私の血が護るのは、物じゃない!ちゃんと心が通った、真白。あ

なたを護るんでしょ……。だから、そんなこと言わないでよ……」

言い終わって、堪えられなくなり嗚咽する美鶴。
畳の上に跡をつくる涙を見ながら、泣き崩れた。
熱を持つ美鶴の頬に、冷たい指が這う。

その指が流れる涙をぬぐってくれた。
言わずとも分かる。真白の指。

「……………美鶴は、よく泣く」

柔らかい声。

小さくても、透き通るような声。

「多くの神々は自分の子孫を残してくれる娘を大切に護る。たとえ
力がなくとも、必死で護るんだ」

ゆっくりと話をする。

その声は泣いている赤子をなだめるような声だった。

「雪神も例外ではない。だから、僕も本能で美鶴を護る。昔、本当
に小さいころだけど母様に言われたことがある」

母様。

その言葉を聞いて美鶴はハッとす。

いつのまにか涙は止まっていて、美鶴はじつと真白を見つめていた。
懐かしそうな顔をして話す真白はとても優しい。

「あなたはきつと将来、深い愛情を持って花嫁と接する。だからそ
の都度の花嫁を大切にしなさいって、母様は言った」

美鶴の一滴の涙を拭って、髪を指ですく。
大切に、愛おしそうに触れる。

「頼りないけど、美鶴は必ず護る」

決意に満ちた瞳だった。

あまりにも純粹に向けられる真白からの思い。

美鶴もただ受けるだけは嫌だった。

「じゃあ、私も真白を護るから。だから、もうあんなこと言わないで」

ちゃんと理解してくれたのか。

それは分らないけど、先刻の真白の話や今の言葉に頷く姿を見て、今はそれでいいと美鶴は思った。

真白についてもまだ分らないことがたくさんある。

甘えただったり、急に引き離すようなことを言ったり。

何を恐れ、何から抗い、何を秘めているのか。

真白の心にある陰を知りたいと思う反面、真白は許してはくれないだろうという思い。

何より、真白の母親の事を知りたい。

本当に知らないことがたくさんあると分かったら、できることはひとつだ。

「真白」

じつと真白を見つめる。

真白も美鶴の思いを読み取るように、見つめ返す。

「社に、行こう」

美鶴がそう言うと、快く頷いて立ち上がった。

真白には薄いピンクのマフラーを渡して。

美鶴は部屋からとってきたコートを羽織り、二人は玄関に向かった。

花嫁と兎

先程の晴天とは一変して、空は雪雲に覆われている。

社へ向かう道中、美鶴と真白は無言だった。

家での事もあって、二人の間には気まずい空気が流れていた。

落ち葉を踏んで、歩いていく。

風が二人の間を吹き抜けていき、更に距離を広げたような気がした。随分な距離を歩いているような気がするけど、目的の社はまだ見えない。

途中からこの森の奥へと進む道は、道なき道となっている。どうりで今まで美鶴が社の存在に気が付かなかったわけだ。

「疲れた……」

体力は人並み以下だと自覚している。

日頃運動などと滅多にしない美鶴は、真白のペースについていくのが辛くなってきた。

不意に美鶴の3歩先を歩く真白が振り返る。

息が上がっている美鶴を見て、近づいてきた。

「疲れた？」

美鶴は首を縦に2回振って訴える。

すると真白はうーんと唸って美鶴に背を向け跪く。

「よし、乗って！」

突然の真白の行動に驚き、美鶴は目を丸くする。

そしてその行動の意味を理解するのに少々時間を要した。

「だ、だめだよ！」

「何故？」

真白にそう問われ、言葉につまる。

「何でって……は、恥ずかしい、し……」

美鶴は頬を紅潮させ、次第に声が小さくなった。
元々から小柄な美鶴が真白には更に小さく見えた。

「恥ずかしがる必要などない、美鶴が困っているのなら助けるのは当然だ」

さも当たり前、というような真白の態度に狼狽える。

美鶴は、真白を直視できなくなり目を背けた。

不意にどこからか、微かな足音が聞こえた。

さく、と落ち葉を踏む音が前から段々と近づいてきている。

顔を上げて前を見ると、琥珀色の長髪を一つに束ねている見目麗しい少年がじつとこちらを見ていた。

「真白、ねえ……」

いつのまにかそばにいた真白に声をかけて確認する。

真白が少年を見る目は探るような目だった。

少年は真白の姿を見た途端に跪き、言った。

「我が主、お久しぶりでございます。予定よりあまりにも遅いので、

お迎えにあがりました」

その言葉を聞いた真白が一目散に少年の元へと駆け寄る。

その少年、先程は気付かなかったが、目は燃えるような赤だった。

「すまない、少し用事ができて遅れた」

真白がその少年を見る目は優しかった。

そして美鶴は一人、置いていかれているようで寂しく感じる。

「あの……、あなたは？」

おずおずと美鶴は少年に問いかける。

少年ははつとして、今度は美鶴に跪く。

「失礼、花嫁様。紹介が遅れました。私は代々雪神様に仕える白兔の家系の者です。鏡とお呼びください」

鏡と名乗った少年は恭しく頭を垂れる。

美鶴はそのかしこまった態度にまた狼狽えた。

「えっ……と。私は、雪村美鶴」

鏡は顔を上げて、美鶴をじっと見つめる。

その赤い瞳は嬉々としていて、少しばかり表情も柔らかい。

「存じております美鶴様。あなた様に会えるのを、楽しみにしておりました」

そう言う鏡の表情は少年そのもので、本当に嬉しく思ってくれてい

るのだと伝わる。

鏡の話では、自分と美鶴を手伝うよう真白に言われたとのことだった。

「白兔の家についてはまた後程お話し致します。主、私だけでは力不足かと思ひ社にはもう一人待たせております」

「そうか。本当にありがとう、感謝している。鏡」

真白がそう礼を言うと鏡は少し頬を赤くして俯いた。

「こ、こちらです」

照れているようだ。

それでも美鶴達を案内する鏡は先陣を切って歩き出した。

それから5分程歩いていくと視界が晴れた。

薄暗い森を抜けたそこは、清廉な空気で満ちていた。

社が、その空気を造り出しているかのような。

自分などが、易々と近づいていいものなのか。

美鶴はそう躊躇して立ち止まる。

「……どうかされましたか？」

立ち止まる美鶴を不思議に思い、鏡が声をかける。

少し間をおいて、美鶴は鏡に言った。

「ここは、私なんかが立ち入っていい場所じゃない」

小さな声だったけれど、鏡には届いていたようだ。

美鶴の言葉を聞いた鏡は驚いた顔をした後、少し笑った。

「ご自分を卑下なさらないください。あなた様は神の血をひいているんですよ、雪神様の血を。立ち入れないわけじゃないですか」

それでも、美鶴が戸惑っていると目の前にずっと手が差し伸べられた。

「行こう」

差し伸べられた手は、真白のもので、美鶴が見上げると笑っていた。美鶴はゆっくりとその手に自分の手を重ね、歩き出した。

ゆっくりと、美鶴は歩く。

真白は美鶴のペースに合わせて歩いている。

「……あ」

急に真白が前方を見据えて呟く。

その視線の先を辿ってみると、一人の少女が社の階段に座っていた。鏡と同じ髪の色。

その髪は長さこそ鏡と同じものの、結んではおらず、ふわふわとしたウェーブがかかっていた。

そして鏡と同じ赤い瞳を持っている。

「あつ、主！」

その少女は真白を見ると、すごい速さで駆け寄ってきた。

「お久しぶりですー！覚えてますよね？ね？」

そして少女は凄いい勢いで真白に詰め寄る。

真白が気圧されているのを初めて見た。

それほどまでに少女の威力はすごかった。

「っ、椎^{つゐ}……」

やっと真白が声を発した。

すぐさま鏡がやってきて、少女と真白を引き離す。

「椎、花嫁様の前だ。少しは控えろ」

椎と呼ばれた少女は、鏡の言葉を聞いて、そばにいた美鶴を好奇の目でじっと見つめる。

その目の輝きはとても眩しかった。

「美鶴様ですよね！わー！あたし、会えるの楽しみにしてたんですよ！」

椎は美鶴の手を取って振り回す。

真白が気圧されるわけが分かった。

「お綺麗ですねえー。小さい頃から主がご執心になるわけが分かりますー」

「っ、椎！」

真白が声をあげて椎の口をふさぐ。

でもそれは一足遅かった。

「え……と」

褒められただけでも恥ずかしいのに。美鶴は椎の言葉を理解して頬を赤くする。

そばでは鏡がため息をついた。

「申し訳ありません、美鶴様。椎に悪気はないのですが……」

「い、いや別に、いいよそんな謝らなくても」

謝られるともっと恥ずかしくなる。

無邪気に笑う椎を真白も責められないようだ。

「あ、申し遅れました。あたしは白兔の家のもので鏡とは双子になります。椎とお呼びください」

そう言つて鏡と同じように頭を垂れる。

顔を上げると、椎は小さな微笑みを浮かべていた。

さながらその姿は美少女そのもので、女的美鶴も目を奪われる程だった。

「先程申しておりました、白兔の家についてお話致します」

鏡がそう言つと椎は美鶴のそばで話し始めた。

「白兔、雪兎とも言われてるんですが、あたし達の家は、代々雪神様とその花嫁様の、側近となる家なんです」

「私たちは人間ではありません、今は人の姿をとっておりますが、本来はその名の通り兎なのです」

そう言つて急に当たりが煙に包まれた。

その煙が晴れた向こうには2羽の兎がいた。

長い耳、赤い瞳を持つその2羽は言わずと知れた鏡と椎。

「お分かりになりましたでしょうか」

兎の姿のまま話す鏡。

真白と違つて話すことができるらしい。

そうして2羽は元の人型に戻る。

「では、行きましょう」

鏡のその言葉に皆、社の中へと入っていく。

扉を引くと、木特有の音をたてて開いた。

薄暗いそこは随分と埃っぽく長年使われていないことが分かる。

美鶴が少し咳き込むと、真白が心配そうな目を向けてきた。

美鶴は大丈夫、と一言だけ言う。

「ここは、表向きは社となっておりますが、その奥にはこの地の歴史や、雪神様についての極秘の書物が置いてあります」

椎が1つの書物を手にとって言う。

それも埃かぶつていて払いながら説明する。

「もちろん、雪村家についての書物もあります」

そう言われ、まわりを見渡してみる。

例えるなら、学校の教室くらいの広さだろうか。
そこには膨大な量の書物があつた。

「すごい量……」

美鶴は呟く。

この量を目の前にしてそう言わずにいれなかった。

「だから、私達もお手伝い致します」

そう言つて鏡は笑う。

その笑顔はとても活き活きとしていた。

「では、始めよう」

真白のその一言で皆それぞれ別に動きだした。

「暗いなあ……」

奥に行こうとするけど中々進むことができない。

足元に散らばる書物が美鶴の進路を邪魔する。

そして、美鶴の体には先程から異変があり、それも邪魔していた。

「頭、いたい……」

頭痛が治まらない。

鼓動とともに痛みが美鶴を襲う。

美鶴に流れる血が、昔に触れる事を拒んでいるのかもしれない。

「う、あ」

痛みは増していく。

強烈な目眩がして、体を支えようと近くの棚に手を伸ばす。

その棚にあった、1つの書物に指が触れた途端、どくん、と心臓が大きく波打った。

「これ……」

書物を手に取ると不思議と徐々に痛みがひいていく。

表紙をじつと見ると雪神と娘、という字が刻まれていた。

1ページずつ捲っていく美鶴は、まるで誰かに操られているようだった。

『交わした契約により雪村の家は娘を捧げることとなった』

「違う」

この部分ではない。

誰かが告げる。

そして、美鶴のページを捲っていく手が止まった。

『古来より、雪神はこの地を守ってきた神である。四季神の石柱であり、雪を降らせることを仕事とする』

見覚えのある文に見入る。そしてまだ文には続きがある。

『雪神は、他の四季神とは違い男しかおらず、血を繋ぐために人間の娘を花嫁とする事を決めた。後に他の四季神も、花嫁を迎えることとなる。雪神の花嫁に選ばれた娘。その娘の姓は、雪村』

「いた……」

頭痛がぶりかえしてきた。

そこから先を知る事を拒むように。

再び目眩がする。

先程とは比べものにならないくらい強烈だった。

美鶴はその場に倒れこみ、意識を手放していった。

白銀の世界

美鶴はゆっくりと意識を取り戻していく。

目を開けると視界には見慣れた天井、それに真白と椎の心配そうな顔があつた。

「起きたか」

「美鶴様？」

はつきりしない意識で記憶を辿る。

美鶴は、社へ行きそこで何かを調べていたはずだ。

窓の外を見ると、もう暗くなっていて結構な時間が経っていた。

今いるのは自分の部屋で、帰ってきた記憶はない。

一体、ということだろうか。

「いきなり倒れて驚いた。どこか打ってないか？」

上体を起こそうとして真白に支えられる。

そしてその言葉を聞いてやっと思い出した。

「私、倒れたんだ……」

「鏡が今、水を取りにいつております。気分は如何ですか？ 優れな
いようなら、横になっていてください」

「大丈夫」

椎に向けて言うと、でもと引き下がる。

美鶴は椎に微笑みかけて、ありがとうと言つと、椎は口をつぐんでしまった。

静かに襖が開いて鏡が入ってくる。

その手に湯呑を持って、美鶴を見た途端安堵の笑みが零れた。

「よかった、お気づきになられたんですね」

美鶴の元に寄つて来て、湯呑を差し出す。

中からは湯気があがっていた。

「暖かいものの方がよろしいかと。緑茶を淹れてみました」

緑茶を受け取って一口。

温かみが広がって、少し落ち着く。

そして自然に謝罪の言葉を紡ぐ。

「迷惑かけて、ごめんなさい。折角みんな調べようって言うてくれたのに……」

美鶴が呟くと、皆一様に気抜けた顔になる。

何か変なことを言っただろうかと美鶴は狼狽えた。

「確かに、心配はしましたよ」

椎が笑いながら言う。

「でも、あなた様が仰ったことについて謝る必要などありません。迷惑などと、思っわけないじゃないですか」

困ったような笑顔を見せながら鏡が言う。

椎と鏡、2人は顔を見合わせて笑った。

「でも、手間をとらせたんだから謝らなきゃ」

「いっぱい迷惑かけていいんです！そしてあたしたちをたーくさん頼ってください」

そう言って満面の笑みを見せる椎。

今度は美鶴が啞然とする。

いきなり後ろから、真白に肩を抱き寄せられて眩く。

「忘れないで。僕のこと頼りにしてほしい」

それは純粋な切なる願い。

美鶴は顔に熱が集まるのを止められなかった。

「真白？」

呼びかけると回された真白の腕が微かに震える。

そして一層強く抱きしめられる。

すぐるように、美鶴を求める。

まるで真白は何かに怯えるようだった。

今日は、真白がおかしい。

「ねえ……」

美鶴がそう言っていると真白は我にかえって素早く離れる。

「すまない」

目を合わせずに、真白は言った。

皆でお茶をすすりながら、やっと本題に入る。
社で調べたこと、美鶴も覚えている限りを話してみることにした。

「誰かに操られてるようだった」

そう言うと、皆一様に固まる。

詳しく話さなくては変に誤解されたままになるため、美鶴はゆっくりと話し始める。

「よく分からないけど、社に入って少しした時から頭痛がひどかったの。そこからは、あまり覚えてない……でもある本に触れた途端に、私の記憶の中、血に宿ってるっていうのかな。それが私に語りかけてきて、操っていた。本にはね、契約がなんとかって……」

あやふやな記憶がとても憎かった。

悔しいけど、それしか覚えていないのだ。

「ごめん、何か大切な部分を忘れてるっていうのは分かる。でも思い出せないよ」

「それは、少なからずお前の先祖に関係しているかもしれない」

小さく真白が呟く。

その言葉を聞いた3人は、一斉に真白を見やる。

「確証はない。でも、僕にはそう思えて仕方がないんだ」

「それって要するに、美鶴様にはご先祖様の記憶があるってことで

すか？」

椎の言葉に真白は曖昧に頷く。

2人共混乱しているようだった。

「少し、その話は置いておきましょう。私からも報告したいことが」
混乱を解消するように、鏡が遠慮がちに口を開く。

考え込んでいた真白と椎はその言葉を聞いて鏡の話に耳を傾ける。

「雪神の他に、四季神がおられるのは知っておりますね？その四季神と花嫁は、定期的に集まって情報交換をしているのです。邪神やその他についてなど、情報はとても大切ですから」

「……知らなかった」

「だと思いました。主も千鶴様も、必要なことしかお話しませんからね」

真白を見るとばつの悪そうに、美鶴と目をあわそうとはしなかった。

「それ、いつ頃あるの？」

「次にあるのは新年があけてすぐ、元旦の日です」

「今年はこの地でやるようですよ。雪村の家に、皆様お迎えするようです」

考えるだけでなんだか気が重くなってきた。

元々人付き合いが得意ではない美鶴にとっては、大勢の人が集まる

ような行事は苦手なのだ。

重くため息をつく美鶴を見て、真白は必死に話しかけてくる。

「す、すまなかった。もつと前に言っておけばよかった」

「ち、違うよ。大丈夫。急でちよつと驚いただけ」

「……怒っていないか？」

「怒らないよ、驚いただけだってば」

美鶴がそう言うと、真白は安堵の笑みを見せた。

一通り、話をしたが結果はあまり変わらなかった。

皆大したことは分からなかったようだ。

もつとも、十分に調べることはできなかったが。

「また後日、調べに行けばいい」

真白は優しくそう言ってくれる。

鏡と椎も同調して頷いてくれる。

美鶴はそれを嬉しく思うと同時に、申し訳ないとも思った。

「そつえば、外、雪積もってますよ」

椎が窓に張り付いて外を眺めている。

いつのまにか、雪が降ってきていたようで。

何気なく真白を見ると、特に表情はなかった。

「……？」

美鶴の視線に気がついたのか真白が目を合わせ、視線が絡む。恥ずかしくなり、美鶴はすぐ目をそらしてしまった。

目をそらしてしまい余計に気まづくなるのは言うまでもない。真白はますます頭に疑問符を浮かべ、美鶴から目を離す。

「いいでしょ鏡のばか！」

「いい加減にしろ！遊びたいのなら一人でいってくればいいだろう
！」

「一人じゃつまらないから言ってるのにー！」

椎の不機嫌な声と鏡の発する半ば諦めともとれる怒声に気づいて、二人を見る。

拗ねて頬をふくらます椎と鏡は同時に他方を向く。
双子というだけあってシンクロしているようだ。

「見苦しいところを、すみません」

頭を垂れて謝る鏡。

美鶴は鏡に顔を上げてと頼み、事情を聞く。

何となく、この兄妹でも喧嘩をするのかと驚いた。

「雪ですよ！積もったから外行きたいって言ったのに鏡が」

「だから遊びたいのなら……」

「みんなで行ったほうが楽しいに決まってるよー！」

また、言い争いが始まってしまつ。
不思議と止める気がなかったのは、真白が眠そうにしていたからかもしれない。

「構わない。行こうか」

その真白が呟いた。

瞬間に喧嘩がぴたりと収まる。

「美鶴も、いい？」

「私は別にいいけど……」

椎のほうを見ると目を潤ませ、真白を見ていた。

鏡は呆氣にとられたような顔を一瞬見せて、真白と美鶴を見る。

「すみません……」

再び頭を下げる鏡と大喜びな椎。

そんな二人を見て、真白と美鶴は顔を見合わせ微苦笑した。

「薄暗い中での雪もきれいなのは知ってた」

言葉とともに白い息。

美鶴は誰に言うでもなくそう言う。

その言葉を聞いた真白が隣に並び、同調し首を縦に一回振る。
隣の温かい存在に気づき、斜め上を見上げる。

真白は子供を見守るような目で鏡と椎を見ていた。

（無邪気だなあ……）

乗り気ではないと思われた鏡が意外にも楽しそうに、雪遊びに興じていた。

彼はまだまだ子供だからだろう。

「ん」

真白が何か思い立ったように声を発する。
そして美鶴の前に手を差し出す。

「手。美鶴は手袋をしてないから寒い」

擦って温めていた手が真白の手に包まれる。
相変わらず冷たいから、意味はない。
けれど何故か無性に嬉しかった。

「真白も手、冷たいね」

「……次からは、手袋をする」

決心したのか、真白は頷きながら言う。
雪に刻まれていく4つの足跡。

白銀色の雪は、微かに輝いているように見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9227f/>

雪神と少女

2010年10月28日07時24分発行